

# 菊花人形



## 菊人形

まるでどこかの立派な庭園という所を歩いていた。手を繋いでいないと迷子になってしまうほど人が多く、みんな白衣姿で全く黙って同じ方へ向かっていた。幼い私は足がほとんど疲れて、地べたにしゃがんでしまいたかった。しかし、背中を誰かに押され、腕は千切れそうなほど強く引っ張られていた。

「痛いよ！ 足が痛いよ。どこかで休もうよ」

そう叫んでも、誰一人こっちを振り向いてはくれなかった。どうにか必死に堪えて、大きな背中を見詰めてついていくしかなかったのだ。ただ先ほどから私をじっと見下ろすのは、道なりに並んだ菊人形だけであった。どきりとするような生きていない顔が、純白の大輪の中にうずくまって、着物の代わりにそれを模した菊の花々が咲き乱れていた。下からのぞくので、瑞々しい深緑の鋸歯のある葉っぱを透かして、目の覚めるような白や黄や赤紫色の花びらが溢れんばかりに開いていた。

道に沿った小屋の中にも人形はあって、ずっと表障子が開くと、強烈な乱咲きの菊花と青白い人形の顔が現れた。誰かが戸を引いたのか、あるいはそこへ来たから半開きの障子の中が見えただけなのかもしれない。小屋は人形とその花の衣装で満たされていたから、人が潜むような透き間は無かったのだ。すると、どこかで奇妙な声がした。

「そっちへ行ってはいけない。戻れなくなりますよ……」

しかし、誰かが話している様子は無かった。また声がした。

「ああ、みんな死んでしまった」

「生きているのは……だけ」

やっぱり声のする方は誰も居なく、ただ菊人形だけがこちらをじっと見ていた。その人形がしゃべったように思え、はっと驚いた拍子に繋いでいた手を離してしまった。慌てて追い掛けてやっと手を掴んだら、それは人形の手であった。余りの恐ろしさに、みんなとは反対の方へ走ってしまった。

息が切れるまで懸命に走ってきたら、どこかの森の中に独り立っていた。道なりにずっと古びた墓石の並んだ寂しい所であった。しかし、その墓前にはまだ花びら一つ萎びていない真っ白な菊の花が供えられていて不気味であった。木漏れ日が墓石の影を作って、それがずっとこちらの足元まで伸びていた。何だかぺらぺらの影がうごめいて、知らない間にひらひらひらりと近付いてきたようだった。その白菊の花は影の薄暗い中にあっても少しも輝きを失わず、むしろ妖しい光を帯びているのに驚いた。

「あっ」と言ったら、誰かが「あっ」と答えた。それで急に駆け出してしまった。とにかくそこから早く立ち去ろうとするのだけれど、道は凸凹して悪く、小石や木の根が突き出して歩きにくかった。また誰かが言ったような気がした。が、どこにも人影は無く、あるのは寂れた墓石とそこへ供えられた白菊の花だけであった。

「……転んではいけない」

今度は一層はっきりと聞こえた。何だかそれは菊の花がしゃべったように思えて恐ろしくなった。転ばないようにと気づかいながらも、どうにか先を急いだ。

すると、突然と森が開け、車がビューと走る車道に突き当たった。それまでの事が嘘のように騒がしい所であった。ほっとして後は道なりに歩いていたら、車道の下に横断トンネルがあってそこへ風が吹き抜けるらしく、それは誰かが唸るような声に聞えて恐ろしくなってまた走った。